51　ロイヤル・ロンドン病院の創設と発展

柳澤　波香
津田塾大学非常勤講師・青山学院大学兼任講師

ロイヤル・ロンドン病院（The Royal London Hospital）は，ロンドン東部の疾病貧民の救済を目的とし，1740年11月，London Infirmaryとして発足した．創設者は，外科医Harrison，弁護士Baker，アポセカリCole，薬剤師Adamsら7名で，開設資金は100ポンドであった．診療所は設立のための初会合が開かれてから僅か40日間で開設された．

テムズ川下流のロンドン東部地域は，中世から貧民の多い地域であったが，17世紀末頃からは移民の流入も増加した．フランスからはユグノー（新教徒）が宗教的迫害を逃れて英仏海峡を渡り，テムズ川を遡ってロンドン東部に到着した．次に，季節労働者として来たアイルランド系の移民が定着したが，その大半は貧困であった．さらに，ヨーロッパ大陸からユダヤ人がロンドンへと流入した．

病院が設立される前年の1739年は，冷害により穀物が不作となった．記録的な寒さが続き，冬期には大雪に見舞われ，ロンドンへ繋がる道路は各地で寸断された．テムズ川が凍結し，船の航行は不能となり，海運業に打撃を与えた．移民と貧民が多いこの地域では疾病貧民の数が増大したため，診療所開設の必要性は急務となった．

開設直後からLondon Infirmaryの患者数は年々増加したため，診療所は創設地フェザーストーン・ストリートから移転を重ね，現在の病院所在地ホワイトチャペルへと移転，London Hospitalとなった．病院の運営資金は他のヴォランタリ・ホスピタルと同様に寄付金により賄われた．アポセカリ，看護師や病院の事務を担う職員には給金が支払われたが，医師は無報酬で診療にあたった．

ロンドン東部は市内でも貧しく治安のすぐれぬ地域であったため，ロンドン病院の医師のなかには，治療を行なうだけでなく，キリスト教の人道主義，博愛の精神から疾病貧民の心のケア，生活支援に心を寄せる者が多かった．

ウイリアム・ブリザード（1745–1835）は，臨床教育を重視する病院附属医学校London Hospital Medical Collegeを創設し，Royal College of Surgeonsの総長を2度務め，イングランドの外科学に大いに貢献した．敬虔なクリスチャンである彼は，ロンドン病院を退院した後の疾病貧民の生活支援にも心を砕いた．人道主義を重視したブリザードは，84歳になるまでメスを握りつつ，サマリタン協会に関わり矯風活動にも熱心であった．「人類の幸福は疾病の克服にこそある」が彼のモットーであった．トマス・バーナード（1845–1905）は伝道師であったが，ロイヤル・ロンドン病院で外科学を修め，診療に携わりつつ，地域の貧しい子どものために学校を設立した．生涯にわたり25万人もの恵まれない子どもを支援した．彼が創始した児童擁護団体Dr Barnado’s Homeは今日でも英国有数の慈善団体である．フレデリック・トリーヴス（1853–1923）は，虫垂炎の手術・研究で高名であったが，映画やミュージカルにも取り上げられた「エレファントマン」ことジョセフ・メリックを近隣の見世物小屋からロンドン病院に保護した．

19世紀以降，この地域には更にアジア系やインド系の移民が増加し，多文化・多民族地域を形成し，今日に至る．病院の名称は，1990年の創設250周年に際し，ロイヤル・ロンドン病院（The Royal London Hospital）と改められた．病院は1990年代後半からセント・バーソロミュー病院との統合が進められ，1999年Barts and the London NHS Trustとなった．セント・バーソロミュー病院とロイヤル・ロンドン病院では，さらなる高度先進医療の拠点を目指し，現在，建替工事が進行中である．財政上の理由から英国政府が建替工事を中止しようとする動きが数年前にあったが，その折には，両病院の医師が職をかけて署名活動に奔走したとのことである．